松蔭 校長室だより

—校長から保護者の皆様へのメッセージです—

2023年 11月 1日発行

松蔭中学校・松蔭高等学校
校長 浅井宣光

一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。　愛をもって互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい。　（エフェソの信徒への手紙 4:2～3）

ダイバーシティ（多様性）の理解　第2言語としての英語で

先月、本校講堂で「出逢う、つながる、互いに進化する、未来の教育」をテーマに、教育脳科学者の茂木健一郎さんの講演会を開催しました。茂木先生は、IB（国際バカロレア）スクール関西国際学園中等部・高等部（神戸市灘区）の教育アドバイザーを務めておられます。今春、本校との間で未来教育連携協定を締結した記念イベントとしてお招きしました。後半のパネルディスカッションでは、茂木先生から促されて登壇した両校の生徒たちが直接インタビューを受けたり、会場の保護者から「脳科学と心理学の違いは何ですか？」といった質問が飛び出したりと、松蔭の保護者や生徒、関西国際学園の関係者や一般の方々など約 150 名の来場者は興味深くやり取りをご覧になっていました。

両校とも英語を柱に教育活動をすすめているということで、茂木先生は冒頭でご自身の英語に対する考え方を話されました。大学時代に猛勉強して英検 1 級に合格、その後、検定の類を一度も受検していないが、使っているうちに英語力ははるかにレベルアップしたこと。英語は日本同様に世界中の人々が第 2 言語として学んでいて、ビジネスや学問、IT 業界でも日常的に使用される世界共通言語であること。英語ネイティブスピーカーのように英語を話す必要は全くないことなど、生徒だけでなく私たち大人にとっても大きな刺激となり、勇気づけられる内容でした。

校外での入試説明会で、ブースに来られる小学生の保護者の方のなかには、子供への期待として「（英語）ネイティブのような発音で英語を話せるようになってほしい」とおっしゃることがあります。そのような場面では私はいつも、第 2 言語としての英語が持つ世界共通語の意味とダイバーシティ（多様性）理解について、次のように伝えます。英語は約 50 の国と地域で公用語、準公用語とされ、世界人口の約 25%が日常語として使っていること。学校で英語を必修化している日本や韓国、台湾などを含めると数十億人の英語話者が、ポケトーク無しで直接コミュニケーションを取ることができること。人種、民族の隔てを越えた世界共通言語である英語には「なまり」「クセ」があって当然で、顔と顔をあわせて交流するなかで互いの国家、社会、宗教、文化、生活習慣や常識の違いを知り、経験はダイバーシティ理解を促し、積み重ねが人間性を豊かにすること。結果として、世界中どこでも勉強したり働いたり、グローバルな活躍ができる女性へと成長できるのですよ、と。

イスラエル・ガザ紛争が続いています。報道関係者が行う現地の人々へのインタビュー映像を見ると、イスラエル人がテロ行為への怒りを、パレスチナ人が民間人を犠牲にするガザ空爆に対する怒りを、激しい口調の英語で訴えます。近隣国カタールの放送局アルジャジーラは、双方の最新ニュースを 24 時間態勢でストリーミング配信しています。英語ネイティブスピーカーではない記者やアナウンサー、映像から得ることができる情報量は、国内のテレビ局の報道とはけた違いです。来年から高校修学旅行はシンガポールですし、中 3GS の海外研修先はフィリピンです。互いに「なまり」ある英語で、間違いを恐れずにコミュニケーションをはかってほしいものです。「隔ての壁」を乗りこえる勇気と知恵を育む舞台とチャンスがそこかしこにあります。

＊高 1 GL コースの生徒たちは現在、カナダのアルバータ州メデジンハット市にある高校でダイバーシティ研修中です。下欄は、その模様を地元メディア「メデジンハット・ニュース」が取材した記事（上）と、私が「研修のしおり」巻頭に掲載したメッセージです。）

＜カナダの地元紙”メデジンハット・ニュース“で紹介された GL コースの松蔭生＞

MEDICINE HAT NEWS

OCTOBER 29TH, 2023 Enter search terms JOBS Canada

/ Home / News / Sports / Business / Entertainment / Classifieds / Life / Commentary / Contact

LOCAL NEWS PROVINCIAL NEWS NATIONAL NEWS WORLD NEWS SOUTHERN ALBERTA NEWS

Prairie Rose shares cultures with Japanese exchange

BY SAMANTHA JOHNSON LOCAL JOURNALISM INITIATIVE REPORTER ON OCTOBER 28, 2023.

SUBSCRIBE NOW

reporter@medicinehatnews.com

Prairie Rose Public Schools welcomed five Japanese students – Rena Katayama, Hikara Kawano, Kanon Miyake, Natsuka Nishida and Mao Yamanaka – into Eagle Butte classes this month. The students arrived in Canada in early October and have one more week left before flying back home next weekend.

The students attend Shoin Junior and Senior High School in Kobe, Japan, which was founded in 1892 to educate girls.

“In today’s globalized world, language skills, such as English, and cultural understanding are crucial,” head teacher Mr. Shinohara wrote in an email. “The study abroad program to Canada is part of the student’s Global program with an aim of deepening their understanding of global reality.”

The trip allows the students to practise their English skills and learn about different educational systems, which will help them prepare for their future.

Principal of Eagle Butte Rocheal Howes, Rena Katayama, Natsuka Nishida, Mao Yamanaka, Hikara Kawano, Kanon Miyake with PRPS international homestay co-ordinator Andrea Pillman.--NEWS PHOTO SAMANTHA JOHNSON

/ Poll

Are you satisfied with how council has handled the power price issue in Medicine Hat since the summer?

○Yes

○No

○Indifferent

＜GL コース カナダ研修のしおり「校長メッセージ」より＞

「多民族・多文化主義」を五感で体験する

カナダのトルドー首相は就任以来、しばしば「カナダ」を主語に使って演説したり、メッセージを発したりしている印象がある。

“Canada pays solemn tribute to the many lives lost, the unspeakable grief of the Hibakusha, and the immense suffering of the people of Hiroshima and Nagasaki.（多数の犠牲になった命、被爆者の声にならない悲嘆、広島と長崎の人々の計り知れない苦悩に、カナダは厳粛なる弔慰と敬意を表します。貴方の体験は我々の心に永遠に刻まれることでしょう）”（2023 年 5 月広島平和記念資料館の記帳）

“Canada has learned how to be strong not in spite of our differences, but because of them.（カナダは、違いがあるにもかかわらず強くなる方法を学びました。違いがあるからではなく、違いがあるからこそ強くなる方法を学びました)”(2015 年 11 月英国ロンドン、カナダハウスでの演説)

人口減少が始まっている日本とは対照的に、カナダは G7 諸国で最高の人口増加率である。1 年あたり増加率は 2.7%で海外からの移民がその主な要因である。元々 “first nations”と呼ばれる 200 民族ものカナダ先住民と、英国、フランス、イタリア、スペインなどヨーロッパ各国からの開拓移民（入植者）に加えて、アジア系、アフリカ系移民により多様な文化が入り混じり、現在では年間 20 万人以上の移民を受け入れている。「多民族・多文化主義」国家であり、現在のカナダ社会は、“cultural mosaic「文化のモザイク」”と称される。

私の仮説は、トルドー首相が「モザイク」状の国民に「カナダの一員」としての意識を持ってほしいからこそ「カナダ」を主語に多用している、というものだ。カナダでは、いったん国籍を持てば「カナダ国民」としてリスペクトされ、「カナダの一員」としての地位が保障され、社会で平和に共生する権利を得る。首相が「カナダは」という時、カナダ国民は「カナダ＝私」の一体感を持つ。上述のロンドンでの演説は、自国民へのメッセージとして捉えてもよいだろう。

これからの 1 カ月間、滞在するコミュニティーでカナダの「多民族・多文化主義」の現実を五感で体験してほしい。そして、あなたの“Open Heart, Open Mind”精神の成熟度を試していただきたいものだ。

もっとも身近な課題「ジェンダー・ダイバーシティ」

新聞記者と社会学の専門家が、ジェンダーに関して対談をしたという記事に次のやり取りがありました。

（記者）女子校が夏服に衣替えという写真も定番です。伝統があり爽やかなのですが、違和感を覚える女性記者もいました。

（専門家）写真自体はいい写真。ただ毎回同じでなくてもいいのでは。男子校だって共学だっていいでしょう。

松蔭関係者ならばたちまち「ビビッ」といったところです。記事の主旨は、あらゆる事柄についてメディアの役割として、ジェンダーステレオタイプに陥ったりしていないか、不平等に扱ったり、役割分業の強化や肯定する文脈になったりしていないかを考えるべきだ、ということで、至極当然のことと感じました。神戸の初夏の風物詩と言われるようになった本校の衣替えですが、時代の在り方が急激に変化し続けている今、毎年の写真記事をステレオタイプに捉える側面もあるのだと理解しました。

ダイバーシティのなかで、最も身近で幅広いものがジェンダーでしょう。「ジェンダー・ダイバーシティ」という表現も聞かれるようになりました。たんに「性的多様性」を意味するのではなく、「性別に関する規範にとらわれず、多様性を尊重すること」という広い意味の概念です。近隣の女子校でも最近、スラックスを採用してスカートとスラックスのどちらかを選択できるようにした学校があります。従来のルールに縛られることなく、固定観念を捨て去って柔軟に対応するべき時代に入っています。

LGBTQ もジェンダーに関連して近年取り上げられるようになった問題です。お茶の水女子大は、2018 年、トランスジェンダー女性（出生時に男子とされ、性自認は女性）の受け入れを公表し、これまで女子大では合計 6 校がトランスジェンダー女性に受験資格を認めています。そのうちの 1 大学の学長が「21 世紀の女子大学のミッションとして、多様な女性のあり方を包摂していく」とコメントしていますが、ダイバーシティ（多様性）を認め合い、インクルージョン（包摂。すなわち個々の違いが受け入れられ、互いに尊重されている状態）をはかろうとするグローバルな方向性に合致しているように受け止めました。

高等教育機関の「ミッション」（＝果たすべき使命）として、ダイバーシティとインクルージョンの課題は、ジェンダー・ギャップ（男女の違いにより生じる格差）の問題とも関連するのではないでしょうか。世界経済フォーラムが、毎年公表している「世界のジェンダー・ギャップ指数」は、経済、教育、保健、政治の分野毎に各使用データをウェイト付けして算出されています。2023 年、日本は世界 125 位で過去最低となり、特に政治・経済で改善していないという点は、先だっての内閣改造で副大臣・政務官に女性の任用がゼロとの報道からも現実の問題として存在しています。松蔭生たちが将来、ジェンダー・ギャップに直面したとき、乗り越えるスキルなり、レジリエンスなりの基盤を育成するという意味で、女子中学・女子高校としても現実の課題に与（くみ）し、対応が求められる時代に入っています。保護者の皆様のご意見をお聞かせください。